

秋の庭から

加藤文子

体調をめずらしく崩し、十一月に予定していた展覧会を断念した。

夏の展覧会を皮切りに、しばらくコロナで静かに過ごしていた毎日が一変、予期せぬ事態も重なって、ゆっくりしてはいられなくなった。

植物は活動期を迎え、外仕事も忙しい中、次の展覧会を間近にひかえたある日、旧友の訃報が届く。あまりに突然のことでショックがぬぐいきれないうちに、独居生活を送る長兄も亡くなった。

数カ月のあいだのできごとに右往左往するばかりであったが、体力も気力も消耗していた。

以前はすこしの休養をとれば容易に持ちなおせたのだが、体力の衰えは自覚を超えて加速していたものと思う。

東京で秋の展示を終えた頃から、体調はいよいよあやしくなった。



会期終了を待ってましたとばかりに、一気に崩れたのだ。身動きするのもままならない状態に陥った。体からも心からも、一旦休みなさいと、言われているように思えた。言うことを聞きなさい……と。

寝ても良くなくなるような気がしなくて、ゆっくり庭をまわる。はじめは歩くのがやっとで、何もできなかった。三日ほど過ぎた頃から、少しずつ回復を実感できるようになった。活発に動くのは難しかったので、できることからしようと思った。

ひとつひとつ盆栽を抱えて、仕事場の回し台へ運んで手元に据えて対面する。のぞき込んでじっくり見ていると、それぞれの秋を迎えた姿がよーくわかる。

シマ風知草の根元では、風が種を運んだのか、杉の実生が隠れている。この先、野草とどのように共生していくのだろう。

春から夏にかけての大雨で活力の萎えた植物へ秋の肥料をひかえていたが、接しているうちに栄養が必要と思われる盆栽に出会う。サインを受け取ったものへ施肥をはじめてみると、けっこうある。今日があつて良かった。気づいてあげられて良かった。

初夏に降りつづいた雨のせいなのか、蕾を抱えたまま立ち枯れているリンドウがここそこにある。今年のリンドウは少し残念なことになってしまったが、わずかに開花に至った目を射るような紫の花は、やはり格別だ。

秋の定番、イトススキや風知草の花穂<sup>かすい</sup>、ホトトギスのうす紫と白の花、実をたわわにつけた西洋カマツカ、モミジなど、雑木の見事な紅葉がつくり出す風景もこの上ない。

温室脇の低い棚の上で、オレンジや赤色のマツバのような細かな葉をなびかせているのは、コレオプシスムーンビーム。名残のレモン色の花が一輪、輝きを増す。

そんな秋の庭で小さな黄蝶が戯れている。なぜか今年は紋白蝶<sup>たゆた</sup>は見かけなかった。その揺蕩<sup>たゆた</sup>う姿を見ていると、何でもない、何でもないヨと言われているような気がしてくる。まるで心配など存在しないかのような様子でチロチロ舞っている。

今年最後の展覧会をあきらめたことで、植物とゆっくり過ごす時間、心のゆとりもできた。体の中がほぐれてくるのが感じられて心地よい。



モミジ 紅くもえて

撮影：加藤文字